

Costume and Textile

No.35

服飾文化学会会報

2018年3月

2018（平成30）年度 第19回服飾文化学会大会のお知らせ

会員の皆様には既にお送りしましたお知らせのように、2018（平成30）年度 服飾文化学会 第19回大会を下記のとおり開催いたします。多くの皆様がご参加くださいますようご案内申し上げます。

記

開催日 2018年5月12日（土）・13日（日）
開催校 東京家政学院大学 町田キャンパス
〒194-0292 東京都町田市相原町2600
【研究発表】 1号棟 1206教室
【作品展示】 1号棟 ローズコート
【自由見学】 東京家政学院生活文化博物館

1. プログラム

5月12日（土）
13：00～14：05 研究発表
14：15～15：45 特別講演
演題「NHK大河－衣裳が語るドラマの創り方」（仮）
講師 千原初江氏（株式会社鈴乃屋広報部）
15：55～16：25 総会
16：40～18：00 情報交換会（3号棟 第2食堂）
5月13日（日）
9：10～12：10 研究発表
作品・ポスター展示ショートスピーチ
12：10～13：10 昼食
13：10～14：40 作品・ポスター展示説明・質疑応答
（展示会場にて）

※作品・ポスター展示期間は、5/12（土）13：00～5/13（日）14：40です。また、ショートスピーチ

は、研究発表会場で行います。

※東京家政学院生活文化博物館は、両日開館しています。
※発表件数によっては時間変更が生じますので、後日送付しますプログラムのご確認をお願いいたします。

2. 参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
情報交換会費	会員	4,000円
	非会員	4,500円
	学生会員	2,000円
	学生非会員	2,500円
昼食代（5/13）		1,000円

3. 発表・参加申込

（1）発表申込締切日 2018年3月28日（水）

- ①既にお送りしました「発表者へのお知らせ」（2種）に沿って、第19回大会・総会実行委員（藤田恵子）までEメールにてお申込み下さい。（3/28 必着）
- ②発表形式には、口頭発表・ポスター展示・作品展示の3種があります。
- ③発表は未発表の研究報告で、共同発表者とともに本会会員に限られます。非会員の発表希望者は学会ホームページから入会手続きをお願いいたします。

（2）要旨原稿締切日 2018年4月20日（金）

（提出先：kfujita@san.kasei-gakuin.ac.jp）

- ①用紙：A4縦置き、横書き、1枚
- ②余白：上25mm、下30mm、左右30mm
- ③文字：10.5ポイント、明朝体

（3）参加申込・払込締切日 2018年4月20日（金）

ゆうちょ銀行 振込口座 00140-8-392386
加入者名：藤田 恵子（フジタ ケイコ）

4. 特別講演

◆講師 千原初江氏

◆演題 「NHK大河－衣裳が語るドラマの創り方」(仮)

◆講演内容

恐らく、服飾文化学会会員の皆様もいずれかは強くご記憶の、NHK大河ドラマ「風と雲と虹と」(1976年)から昨年放映の「女城主直虎」まで、数々の作品で役者が身にまとう衣裳の多くに千原初江氏の「手」が入っています。しかし、視聴者としての目はドラマの展開を追い、一つひとつの衣裳が物語るドラマトゥルギーに気付くことは多くないかも知れません。

ご講演では、ドラマの進行に併せ、あるいは対立もしながら、役者を台詞や表情以外で際立たせる衣裳を時には生地選びから、デザイン、着付け、コーディネートに至るまでを担当し、もうひとつの大河ドラマを創り上げる「仕事の世界」を語っていただきます。

◆講師のプロフィール

1970年3月東京家政大学短期大学部栄養科卒業。京都衣裳株式会社(現株式会社東宝コスチューム)に所属、NHK大河ドラマの第14作「風と雲と虹と」(1976年)から衣裳担当としてデザイン、着付け、コーディネートに携わり、以降第20作「峠の群像」(1982年)まで大河7作品を手掛けて来られています。

また、1984年、株式会社鈴乃屋に入社からは、第23作「春の波涛」(1985年)から第56作「おんな城主直虎」(2017年)迄の計33作品の衣裳考証、一部衣裳デザイン、製作に携わって来られ、多数のTVドラマ、映画などの衣裳監修・考証・デザイン、構成も担当されています。

5. 自由見学

◆東京家政学院生活文化博物館

◆展示テーマ「収蔵品展 洋装と装飾コレクション」

今回の収蔵品展はオートクチュールドレスやヨーロッパのレース、刺繍が施された民族衣装などを厳選して展示します。これらの資料は、旧東京家政学院短期大学の洋裁・手芸研究室の教具や研究用に購入されたもので、学部と短大の再編に伴い生活文化博物館に移管されました。当時の教員が優れたデザインや高度なプロの技術を学生へ直接見せるために選びぬいた資料です。年代は17世紀のものから40年前のものまでありますが、現在でも色あせず美しさを保っていますの

で、ぜひご堪能ください。

※5月12日(土)・13日(日)は開館しています。

6. アクセス

【相原駅西口】(JR 横浜線)

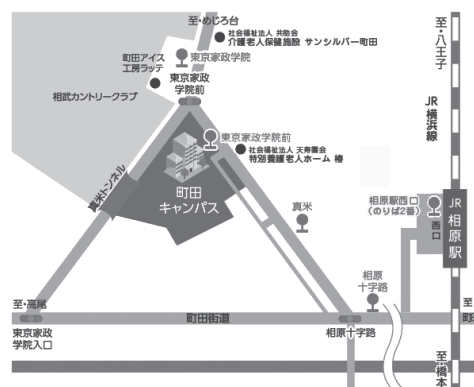
<バスのりば2番>から「東京家政学院」行、乗車時間約9分、<バスのりば1番>から「大戸」行、「法政大学」行(急行以外)「相原十字路」下車、乗車時間約5分、徒歩約10分

【めじろ台駅】(京王高尾線)

<バスのりば4番>から「東京家政学院」行、乗車時間約13分

【八王子駅南口】(JR 中央線)

<バスのりば7番>から山田駅経由「東京家政学院」行、乗車時間約28分、めじろ台駅・朝日ヶ丘経由「東京家政学院」行、乗車時間約30分



7. 連絡先

服飾文化学会 第19回大会・総会実行委員会

〒194-0292 東京都町田市相原町2600

東京家政学院大学 服飾造形学研究室 藤田恵子

kfujita@san.kasei-gakuin.ac.jp TEL 042-782-3427

2018年度 総会のお知らせ

第19回大会において、総会を開催いたします。本学会の発展のために、多数の会員の総会への参加をお願いいたします。正会員の方は、5月1日までに出欠記載の返信葉書に切手貼付で開催校へ返送してください。

日時：2018年5月12日(土) 15:55~16:25

会場：東京家政学院大学 1206教室

議事(予定)

・平成29年度 事業報告、決算報告、監査報告

・平成30年度 事業計画審議、予算案審議

特集記事 企画展「辰五郎と滋の見た 明治の衣生活大転換」について

三友晶子（東京家政大学博物館学芸員）

平成29年10月19日（木）から11月24日（金）まで、東京家政大学博物館において企画展「辰五郎と滋の見た 明治の衣生活大転換」が開催された。本展の主題は、東京家政大学の校祖渡邊辰五郎（弘化元年－明治40年）と、その長男で二代目校長の渡邊滋（明治10年－昭和39年）の視点を取り入れながら、明治という大転換期に、日本人がどのように衣服を選び取り、今に続く近代的な衣生活を築いていったのかを見直すことにあった。



企画展ポスター

展示構成は「第1章 洋装のはじまり」「第2章 和と洋のはざま」「第3章 和服の近代化」とした。第1章で明治時代の衣生活の変化として真っ先に浮かぶ「洋装化」を取り上げ、第3章では和服においても近代的な生活に適した合理化が進んだことを紹介した。展示担当者としてこだわったのは第2章で、和服から洋服への変化の途上にある服、あるいは和とも洋とも分けられない服に注目した。

例えば「改良服」。明治時代に、着物の短所（帯が腹部を圧迫する、長い袖が邪魔になる、足さばきが悪い等）を改良して、より活動的な衣服を創出しようという動きが、医師や教育家、美術家の間から起きた。渡邊辰五郎もその一人で、辰五郎の考案した改良服は、明治30年代に東京裁縫女学校（東京家政大学の前身）の教員や優秀な学生が着用している。改良服の実物は残っていないため、企画展では本学教員が裁縫雛形などから制作した復元品を展示した。また、女子美術大学歴史資料室から、創設者の一人横井玉子考案の改良服（復元）を借用して展示した。二つを並べることで、改良服の考案が当時の社会的な課題であったこと、また考案者によって衣服改良に対する考え方やア



左：渡邊辰五郎考案の改良服（復元）東京家政大学博物館 蔵
右：横井玉子考案の改良服（復元）女子美術大学歴史資料室 蔵

プローチの方法が異なっていたことが確認できた。

ところで、渡邊辰五郎は裁縫教育の道に入る前、15歳から日本橋の仕立屋で9年間奉公し、その後独立して店を構え和洋裁縫の注文に応じていた。また、滋は明治33年にアメリカの裁縫学校に留学し、本格的な洋裁を学んでいる。つまり二人とも、教育者としての実績を残すのに先立ち、まず自ら衣服製作に通じていた。このことは、改良服の考案に見られるように、衣生活への具体的な提案や、裁縫教育における実践的な指導を可能にした。

当館の主要なコレクションであり、本展でも多数展示した裁縫雛形（裁縫の練習用に製作された衣服等のミニチュア）に目を向けると、特に明治時代に製作されたものの中に、本格的な洋裁によるジャケットやスカートがある一方で、日本人でも作りやすいように和裁の要素を取り入れて仕立てたシャツやズボン下、西洋前掛等が含まれていることに気づく。新たな衣生活を築こうという高い志を持ちながらも、現実を見据え、自分たちに相応しい方法でそれを実現しようと奮闘した人達の姿をそこに読み取ることができるだろう。

来館者からは「今の私たちの服装が明治の人々の苦勞と工夫の上に成り立っていることを知った」「服を作る人（辰五郎・滋）の立場から見た服の歴史が新鮮で面白かった。」等の感想が寄せられた。また、「年月を経たモノの迫力に圧倒された」「実物や裁縫雛形を見ながら解説を読むことで、歴史の流れが大変生き生きと頭に入ってきた」という声には、衣服を展示して歴史や社会を語ることの意義と可能性を改めて考えさせられ、襟を正す思いがした。

2017(平成29)年度 研究例会の報告

2017年度研究例会は10月21日(土)に東京家政大学(120-3D講義室)で開催されました。「軍服 その歴史とイラストレーション」と題して辻元よしふみ氏と玲子氏のご夫妻による講演が行われました。出席者は学会員と非学会員を合わせて54名でした。講演の内容は次の通りです。(研究例会担当 藤田恵子)

「Uniformologyとは？」

辻元 よしふみ

私どもは主に軍装史と、それが一般紳士服の歴史とどういう関連があるか、を研究しております。古い時代の紳士は基本的に王侯貴族で、広い意味では騎士とか軍人であります。必ず甲冑とか軍服を身に付けていて、それが紳士服の主流となり、女性の服飾にも影響を与えてきたわけです。軍装史の理解が服飾史研究全体に厚みをもたらすわけでございます。

ユニフォームロジー(軍装史学/制服学)は歴史学の一分野に分類され、制服、勲章、個人装備品の研究を含みます。外国では一般大学の歴史学科のほか、芸術系大学、軍事大学などで研究しています。

さて、軍服はいつからあるのか? なんと古代シュメール軍(5000年前)です。すでに揃いのユニフォームが登場しています。明確に国家として装備品を支給したのはアレキサンダー大王のマケドニア軍。次いでローマ帝国です。ローマ軍団の場合、プロの職業軍人による軍団制を敷いてからは、統一的な軍装を支給したので、まさに軍服だったといえます。しかし帝国後期には制度も崩壊したと思われます。

その後は、封建時代を迎えて国家としての軍服という考え方は薄れ、騎士団ごとに軍装をそろえる、ということに。13世紀まで主流のチェインメイル(鎖かたびら)から、全身を装甲板で覆う新型甲冑プレート・アーマーが14世紀には登場した結果、男性の上着の裾が短くなり、脚線を入目にさらすようになった流行や、甲冑の下着から生まれた、ぶくぶく膨らんだダブルレットの流行を生むなど、軍装と一般の紳士服の間に大きな関連性が見られました。当時の支配者はイコール騎士なので、王侯貴族の服装が甲冑に規定された面があります。

ルネサンス期から17世紀の初め、国家の軍隊が封建騎士団から近代的な正規軍に移り変わる狭間の間は、傭兵が戦場を支配します。彼らは傭兵隊長の考え方により、一定の装備をそろえる場合もあったが、基本は服装や装備は自弁です。当時、傭兵のファッションか

ら、全身に切れ込みを入れるスラッシュ・ファッションが流行。戦場で破れた服の下に、略奪した布を押し込んだのがルーツだといえます。

近代的な軍服の登場は、一般的にはドイツ三十年戦争の中期1625年に、スウェーデン国王グスタヴ・アドルフ2世が採用したと言われます。軍服が17世紀から普及した背景を考えると、選択徴兵が一部の国で始まり、国家の常備軍成立と共に近代軍服が登場したといえます。軍人の階級制度が整うのも17世紀。将校、下士官、兵士といった階級を、服装からも明確にする必要性も生じました。さらに軍服普及の背景として、銃器の普及があります。17世紀に入ると、火器の発達と普及で甲冑の使用が急速に廃れます。甲冑の廃止は、さまざまな色調の軍服を統一採用するのに都合が良く、軍服は甲冑に比べてずっと廉価であり、大量調達するのに好都合でした。

なぜ初期の軍服はあんなに派手だったのでしょうか。黒色火薬の時代、戦場は濛々たる煙で一寸先も見えない状況だった。一方で銃の能力は低く、遠くから狙撃される心配はあまりなかった。そういう状況なので、指揮官から見て自軍がどこに展開しているかを把握の方が重要だった。よって、黄色、青、赤といった原色が好まれ、装飾も金や銀の刺繍や組みヒモ細工がきらびやかに用いられたのです。

しかし、火器の能力が向上してくると、遠くから狙撃される危険性が増して、目立ちすぎる制服は徐々に問題となります。そこで1848年にインド駐在の英国軍で、赤い軍服に代わる泥で染めた軍服を採用。これが現地の言葉で泥を意味する「カーキ色」軍服の原点で



会場風景



す。さらに火薬が無煙化する19世紀後半にはカーキ色の服が徐々に普通になり、20世紀の第1次大戦頃までに、世界中の軍服がカーキ色や灰色など目立たない色になります。第2次大戦では迷彩服（カモフラージュ）

が登場し、今日に至るわけです。現代においては、この国でも、①フォーマルウェアである礼装、②日常勤務用の常装（勤務服）、③戦場などで着る野戦用の戦闘服（バトルドレス）の3種類を最低でも制定するのが普通です。

★ユニフォームモロジとヒストリカル・イラストレーション〈歴史考証復元画〉について 辻元 玲子

ユニフォームモロジ研究には歴史復元画家が必要になります。古い時代になるほど遺物も経年劣化して失われ、たとえ残っていても、ボロボロで、色あせて、何色か判別がつかなくなります。それを時代考証しつつ再現するのがこの分野の画家の使命です。

昔の絵画史料が残っている場合も、画家が、面倒臭がって、わざと剣が見えないような構図でごまかすことが非常に多い。また、依頼人の背中やお尻ばかり描く画家はいませんから、正面の構図になりがちで、後ろ姿はどうだったのか、さっぱりわからないということも多い。こうした点も、当時の文献などを調査して、画家の理解と知識で補って埋めてゆくのが、歴史考証復元画家の仕事といえます。

ではここで、歴史考証復元の実例として、「プロイセン王国ルイーゼ王妃のスเปนサー・ジャケットの研究」をお手元の資料でご紹介します。

スเปนサー・ジャケットとは、裾を短くカットした燕尾服スタイルの上着のことです。名前の由来になった第2代スเปนサー伯爵ジョージ・スเปนサーは、乗馬用燕尾服を着て狩りに出、イバラに裾を引っかけて破いてしまった。また別の説では、野営中に焚き火の

火が裾に引火し焼けてしまった、という話もある。いずれにしても、こうした逸話から生まれた短い丈のジャケットがスเปนサー、あるいはスเปนサー・ジャケットと呼ばれて人気を得ました。

この服はまず男性用の一般紳士服や軍服に採り入れられ、その後のタキシードの原型につながっていきます。一方、女性たちが防寒の意味で着るようになり、以後、長く流行しました。

ここで、本日の本題である軍服の影響を受けた異色の女性用のスเปนサー・ジャケットを紹介します。

これはプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世の妃、ルイーゼ（1776～1810）が着ていたスเปนサー・ジャケットを調べて描いた復元画で、現物はドイツの国宝として門外不出の状態です。

隣国フランスに皇帝ナポレオンが登場し、戦争の危機が高まった1806年の初め、同国王は、当時としては異例なことながら、ルイーゼ王妃を第5竜騎兵連隊の名誉連隊長に任命し、彼女のために専用の軍服を誂えることにしたのです。このときに王妃の服のデザインと製作を担当したテーラー、フランソワ・フォーゲル François Vogelは、王妃に男装させるのではなくて、あくまでも女性用のミリタリー・ファッションとして、スเปนサー・ジャケットとロングスカートの組み合わせを採用しました。男装ではない、女性専用の軍服、というものは、恐らくこれが世界で初めての実例だったと思われます。

後にナポレオンはルイーゼの頑張りや愛国心に心打たれ、「あの王妃がプロイセンでただ一人の真の男だ」。“le seul vrai homme en Prusse”と讃えたそうです。しかし無理がたたったのか、王妃は4年後に34歳の若さで病没します。

本格的に女性が軍人となる時代はずっと後、1914年の第1次大戦のころですが、このルイーゼ王妃のスเปนサー・ジャケットは、時代に先駆けて歴史を彩った革命的な婦人服だった、といえるでしょう。

軍服と一般の紳士服は影響を与え合いながら変化し続け、女性の服もその影響下にありました。日本ではまだまだ軍装史学の研究は大変珍しいですが、軍装史学を研究する醍醐味は、紳士服飾史や婦人服飾史の理解を立体化し、深めるための研究と言っても過言ではないと思います。

2017(平成29)年度 論文発表会の報告

本年度の論文発表会は、2018年3月2日(金)13時10分より文化学園大学のC071教室にて70名の参加者をもって開催された。はじめに、副会長の大綱先生より「活発な質疑応答を行い、この経験を今後につなげて欲しい」と発表者への期待が述べられ、以下プログラム通り卒業論文6件、修士論文2件の発表が行われた。

<プログラム>

開会の辞 副会長：大綱 美代子(大妻女子大学)

卒業論文

座長：新實 五穂(お茶の水女子大学)

1. ジョルジュ・バルビエとオリエンタリズム
－『千夜一夜物語』に見られる女性像－
形山 綾海(日本女子大学)
2. 鷺田清一のファッション論
渡邊 彩花(杉野服飾大学)

座長：宮武 恵子(共立女子大学)

3. ハンドメイド市場－その実態と検証－
梶原 樹里、野末 真季、宮田 桃子
(実践女子大学)

座長：藤田 恵子(東京家政学院大学)

4. ツーピースドレスの制作
－福岡県の郷土調査から－
梶原 久美子(東京家政大学)

座長：玉田 真紀(尚絅学院大学)

5. バレエ講演『シンデレラ』の衣装デザイン・制作
－継母の室内のドレスと舞踏会のガウン－
田代 裕梨(東京家政学院大学)

座長：富田 弘美(東京家政学院大学)

6. 人体寸法とブラジャーサイズの関係について
－実物製作－

陳 徴(文化学園大学)

修士論文

座長：岡田 宣世(女子美術大学)

1. 岩泉町八重樫家伝来の縞帳の特質
－南部紫の伝承と糸密度・意匠に着目して－
箕輪 恵枝(日本女子大学大学院)
2. 卒業式における女子学生の袴着装の研究
－ファッションの概念を基にした分析－
太田 裕子(共立女子大学大学院)

閉会の辞 会長：能澤 慧子(東京家政大学)

最初の発表は、日本女子大学の形山綾海さんによる「ジョルジュ・バルビエとオリエンタリズム－『千夜一夜物語』に見られる女性像－」であった。アール・デコ期に活躍したファッション・イラストレーターのジョルジュ・バルビエの諸作品からは、西洋の現実世界と東洋の想像世界の強調と調和という二面的な性質があることが明かとなった。その性質をもって、多種多様な女性像をシンプルなアール・デコ洋式で表現していると結論づけた。

2番目は、杉野服飾大学の渡邊彩花さんによる「鷺田清一のファッション論」であった。鷺田のファッション論を追っていくと、それまで鷺田が研究していた身体論の考えが根底にあり、モーリス・メルロ＝ポンティをはじめとする哲学者たちの考え方が活かされており、ファッションを人間の身体に対する行為として捉え、表層的に語られてきたファッションを学術的な視点から論じていることがわかる発表であった。

3番目は、実践女子大学の梶原樹里さん、野末真季さん、そして宮田桃子さんによる「ハンドメイド市場－その実態と検証－」であった。ハンドメイドの実情について、製作販売者、購入者、イベント運営管理者の視点に立ち、現状を整理し、理解を深めること。もう一つは現状の課題を考慮し、解決策を提案しながら、ハンドメイド市場の継続、活発化を可能にする展望を論じるというものであった。たんに調査だけではなく、発表者みずからも製作販売を行ったことで製作者、購入者双方を理解することができ、直接会話をして販売することの大切さを知ることができた。今後は男性向けの商品の提案も必要であることが示唆された。



研究発表風景

4 番目は、東京家政大学の梶原久美子さんによる「ツーピースドレスの制作－福岡県の郷土調査から－」であった。福岡県の歴史と風土の文献調査を行い、福岡県を表現するデザインで技法を模索しながらのツーピースの制作を行った。今回の製作で、福岡県へのさらなる愛着と、何かをデザインする際には、様々な視点を持つことの大切さを体験したものであった。

5 番目は、東京家政学院大学の田代裕梨さんによる「バレエ講演『シンデレラ』の衣装デザイン・制作－継母の室内のドレスと舞踏会のガウン－であった。舞台衣装は、表面装飾に目を奪われがちだが、バレエ衣装では、身体の妨げ、素材、縫製の耐久性、着脱のしやすさ、役柄に合わせたデザイン、色彩、装飾の位置などが重要であると捉え製作を行った。着装評価等から改善点を見出し今後につなげて欲しい発表であった。

6 番目は、文化学園大学の陳徴さんによる「人体寸法とブラジャーサイズの関係について－実物製作－」であった。ブラジャーを購入する際、一度試着した経験を基に、常にそのサイズのブラジャーを購入することがよくあるが、人体計測値でサイズを決定したものであっても、必ず着用感が良いとは限らない。寸法だけでは着心地の良いブラジャーサイズを選択することは難しく、カップ形状が大きく影響していることが、明らかになった。

10分の休憩をはさみ、修士論文の最初は、日本女子大学大学院の箕輪恵枝さんによる「岩泉町八重樫家伝来の縞帳の特質－南部紫の伝承と糸密度・意匠に着目して－」であった。八重樫家伝承の縞帳に着目し、糸密度と意匠の関係性から特質を明らかにすることを目的としものである。岩泉町は自然豊かな環境で植物が比較的手に入りやすかった為、他地域より配色数が多い色であり、独自のデザイン性を生んでいたことを把握し、時代が下るにしたがって糸密度は高くなり、デザインも他地域の影響を受けるようになっていった推移が明らかとなった。今後は紫根染め以外の検証も期待されるところである。

終わりは、共立女子大学大学院の太田裕子さんによる「卒業式における女子学生の袴着装の研究－ファッションの概念を基にした分析－」であった。現在の女子学生が袴着装の情報源としているカタログ資料から項目を抽出し行われた研究である。色彩については、

継続して掲載される色は徐々に減少し、同一色相配色と中差色相配色が交互に増減する傾向が数年の周期で表れているのが明らかになった。和服は、補色や反対色がモダンと言われる傾向にあるが、中差色相配色を好む若い女性は、和服も洋服感覚の色相を好むのだと感じられた。



発表者 集合写真

以上、8 件の発表は、多岐にわたる研究領域と研究方法で大変魅力のあるものであり、学生がひたむきに研究を重ねた結果が良く表れていた。これらの研究をさらに発展させていくことを期待すると、会長の能澤慧子先生が閉会の辞を述べられた。

発表終了後、Bun Caféでの懇親会は、45名の参加者で盛会であった。司会は、論文発表会担当の福田理事が務めた。塚田先生による乾杯のご発声で、論文発表会などが盛会に開かれることで、学会は活気づくものと本会への賛辞と意義が述べられた。発表者と教員、他大学同志の交流もあり実り多い機会となった。

最後に、今回、学生たちに発表を促してくださった先生方、ご協力頂いた先生方に御礼を申し上げたいと思います。

(論文発表会担当 伊藤瑞香)



懇親会風景

***** 事務局より *****

●会員異動 (敬称略、申し込み順)

☆新入会員

正会員

近藤 恵 (お茶の水女子大学)

学生会員

陳 思遥 (文化学園大学大学院)

☆退会者

正会員

佐藤秋成 (平成30年3月31日)

●平成30年度学会費納入のお願い

会報No.35に振込用紙を同封いたしますので、必要事項ご記入の上、納入をお願い致します。またその際、過年度で未払いがある方は、同時にお振込みくださいますよう、合わせてお願い致します。

学会の運営は皆様の学会費によっております。また納入金の記録等の作業は、学生会員である担当理事が、ボランティアで実施しております。この作業が短期間で終了しますように、下記期日をお守りくださいますよう、宜しくお願い致します。

納入期日：平成30年5月31日 (木)

●住所等変更届のお願い

学生会員のご住所・連絡先等の変更は、事務局に速やかにお届けくださいますよう、お願い致します。特に年度末はとかく異動が増えますため、この時期にかかります大会のお知らせなど、返送件数が多くなりまして、事務局 (これもボランティアです) では追跡調査に追われます。

学会からの送付物は、宅配業者に依頼するものが多く、郵便局に移転届を出されても、転送は出来ません。学会へのお報せもどうぞお忘れの無いようお願い致します。

尚、変更は、学会費納入の振込用紙連絡欄に記載されても、担当者が異なるため、2重の手間になりますので、事務局へ郵便、または下記アドレスへのEメールにてお知らせくださいますよう、宜しくお願い致します。

fukubunjim@gmail.com

●事務局移転のお知らせ

下記の通り、平成30年3月末日より本学会事務局を下記に移転します。

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1

共立女子大学被服平面造形室

e-mail : fukubunjim@gmail.com

***** 服飾文化学会メールマガジン

作成準備へのご協力のお願い *****

平成29年度第3回理事会 (平成30年3月2日開催) において、理事会や事務局、各会務理事からの情報の迅速な伝達を図るために、これまでの郵便や宅配メールを、順次メールマガジンに切り替える計画を進めることが承認されました。

つきましては、会員の皆様には、正確なメールアドレスの登録をお願い致します。ほとんどの会員が入会時、及び3年前の会員名簿作成時に登録をされていますが、その後変更のある方も多いと思われます。この機会に、全会員の皆様の登録をお願いいたします。どうぞ宜しくお願い致します。

連絡先：上記事務局アドレスに同じ。

件 名：メールアドレスの登録 (メール受信の見落としを避けるため、必ず件名を付けてください。)

期 日：平成30年5月31日 (木)

会報 No.35 : 2018 (平成30) 年 3 月 31 日 発行

編集発行人：服飾文化学会

事務局：173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1

東京家政大学服飾史研究室

TEL : 03-3961-8273

E-mail : nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp

URL : <http://www.fukusyoku-bunka-gakkai.jp>